

平成28年6月28日(火)

老球の細道246

忘れてはいけない 二人の日本人

会津バスケットボール協会 室井 富仁

E・H・カー曰く「歴史とは過去との対話である」。改めてバスケットボールの創世記に尽力した二人の日本人と対話をした。この二人は、バスケットボールに関わる日本人にとっては絶対忘れてはいけない人物である。一人は、米・マサチューセッツ州スプリングフィールドの「国際YMCAトレーニングスクール」で世界最初のバスケットボールゲームに立ち会った石川源三郎(1866～1956)。もう一人は、日本に最初にバスケットボールを伝えた大森兵蔵(1876～1913)である。

二人に共通していることは、明治の激動期にすでに海外に眼を向け単身アメリカに留学を果たす志の大きさ。もう一つの共通するところは、二人ともアメリカ人の妻と国際結婚を果たし、晩年は悲劇的な別れを経験しているところである。

石川源三郎は群馬県で生まれた。父は戊辰戦争で旧幕府軍の彰義隊と戦い戦死。20歳の時キリスト教を学ぶために渡米。最初は神学校に通っていたが、ここで「私が神から与えられた使命は次代を担う若い人々への奉仕である」と決意。それからサンフランシスコYMCAに通い始め、スプリングフィールドの国際YMCAトレーニングスクールに入学。この時の同期にバスケットボール創案者ネイスミスがいた。

石川は2年生の時に世界で最初にプレーした18名の中にいた唯一の日本人である。石川が描いた最初のバスケットボールゲームのスケッチは今でも残っていて、当時を表す貴重な資料となっている。卒業後は日本に帰国したがバスケットボールは伝えていない。彼が活躍したのは英語力とマネージメントを活かした経済界だった。1902年に三井物産に入社し、ドイツやイギリスを股にかけて活躍した。1914年第一次世界大戦が勃発し、ドイツからの強制退去となった。その時メアリー夫人と長女は日本への帰国を拒みアメリカに渡り、石川はロンドンに行き1917年日本へ帰国。その後奥さんと離婚する。90歳の生涯を終えるまでバスケットボールのことは一切口にしなかったという。

大森兵蔵(ひょうぞう)は岡山県に生まれ、同志社中学(現同志社大学)、東京高等商業(現一ツ橋大学)を経てアメリカ・スタンフォード大学に留学した。勉学に励んでいるうちに、身体が弱くて健康に恵まれなかった自分を顧みながら、「体格、体位が立派で、壮健な日本国民を作りたい。そのためには体育学を」と決意し国際YMCAトレーニングスクールに入学。アルバイト先で19歳年上のアニー(大森安仁子)と世紀の大恋愛の末結ばれる。1908年妻を同伴して日本へ帰国。日本のYMCAを通じてバスケットボールを日本全国へ伝える。

その後日本のスポーツ発展のために日本体育協会を組織し初代専務理事となる。そして1912年日本初のオリンピックとなる第5回ストックホルム大会に日本選手団総監督として参加する(団長は講道館柔道の創始者・嘉納治五郎)。しかし、大森はこの時すでに肺結核を患っていた。日本からシベリア鉄道を経由しての17日間の旅はまさに死への旅立ちだった。オリンピック終了後やっとの思いでストックホルムからアメリカへ渡り、日本への帰国途中死去した。享年37歳。

大いなる志のために世界をかけめぐった2人のバスケットボール伝道者に合掌。